NPO

秋田市

それぞれの土地にある多くの智恵を、次の世代に

鐙 啓記 NPO法人あきた地域資源ネットワーク

取材日 2012.10.02

秋田県内各地にある地域資源（ジオパーク・観光・食文化・地魚・歴史・民俗・自然など）に基づき、地域で活動する団体や個人と協働しながら、地域の振興を図ることを目的としている。男鹿市民の持つ過去の地震・津波経験から防災の知恵と伝統を活かし、災害に遭遇した場合の対処法を考える「災害に強い男鹿の地域づくり協議会」にも参加。

3月11日　14時46分

理事長を務める「特定非営利活動法人東北みち会議」の事務所で会議中だった。突然周りで携帯電話の緊急地震速報のアラームが鳴り、その直後大きな揺れが来た。年配の女性職員がパニックになりかけた若い女性職員をなだめていた。終わったと思ったらまた揺れが来て、3度大きな揺れを感じた。その時は宮城県沖地震だと思い、どうしてこんな日に仙台に来てしまったのだろうと思った。事務所は6階で、隣のビルの屋上から立ち上る煙やビルの外へ逃げ出す人々、隣の専門学校の女子生徒が非常階段で泣いている様子などを見るとはなしに見ていた。

事務所はぐちゃぐちゃで居ることができず、立体駐車場も動かなくなっていたので車の出庫ができず秋田へ帰ることができなかった。近くのホテルに泊まろうとしたが予約で満室という返答だった。しかし、予約客もこの地震ではキャンセルするだろうと思い、ホテル側も夜の9時ぐらいまで予約客が来なければ部屋を解放するということだったのでロビーで待ち、何とかその日は泊まる場所を確保することができた。翌朝、ロビーでワンセグを見ていた人から、津波があったようだという話を耳にした。近くの新聞販売店に行き、号外を見て初めて大災害であることを知った。

その後、同僚2人と一緒に仙台港へ行った。45号線を海に向かって車を進めて行くにつれ、建物に付着した海藻やゴミが津波の凄さを物語っていた。やがて流された車や瓦礫が道を塞いでそれ以上進めなくなった。石油タンクが燃えているのを見て、爆撃でも食らったかのような光景に衝撃を受けた。

道の駅の安否確認

震災後2日目からは、東北みち会議が「東北道の駅連絡会事務局」を担っていることから、道の駅に特化した支援を行なうことにした。国土交通省東北地方整備局と相談し安否確認を始めたが、電話がつながらず確認ができなかった。パソコンは使用できたのでツイッターやブログで情報を集めたが情報が錯綜していてなかなか進まなかった。これは自分の目で確かめるしかないと思い、出かけようとしたがガソリンが無く断念した。

ガソリンの供給が平常に戻った3月末になって、八戸からいわきまで5日間かけて海岸沿いの道の駅を訪ねて回った。場合によっては避難先まで駅長（道の駅の責任者）を探し歩き確認した。震災で被害を受けた道の駅は、みやこ（岩手）、高田松原（岩手）、大谷海岸（宮城）、よつくら港（福島）の4カ所だった。

避難の拠点、支援の拠点としての道の駅

全国の道の駅970カ所に募金箱の設置を呼び掛けた。道の駅は震災直後、避難の拠点として機能した。福島の沿岸に近いところの人たちは道の駅へ避難し、休憩、トイレ、おにぎりの配給などを受けた。宮城県の三本木は内陸部の人たち、上品の里は石巻の人たちがそれぞれ避難する拠点となった。それが一段落するとボランティアや自衛隊の支援の拠点となった。道の駅を通じて被災地へ物資を届けたいという問い合わせも多く、それを受け入れ道の駅から配送する機能も果たした。

道の駅は普段から産直に力を入れていて、農家とのつながりがとても強い。1駅あたり100名前後いる農家会員に声をかけると相当なものが集められる。レストランなども併設しているので炊き出しにも活躍した。多いところで60～70人を雇用しているので人手もある。施設全体の電気を賄える充電設備を持っている道の駅もある。三本木や田老は、国が各県に1つずつ設置した防災拠点としての機能を持たせた道の駅で、自家発電や災害用トイレがあり、防災拠点としての機能を発揮した。
道の駅は震災後数か月ほど大きな役割を果たした。現在も復興支援のイベント開催などを行なっている。
道の駅が避難拠点、地域の支援拠点になり、地域の大きな核になることが、今回の震災で明確になった。
この結果を受けて、国が道の駅を防災拠点として整備する動きがある。施設全体を動かせるような充電設備や、情報発信の場として機能すること、利用者が携帯電話やパソコンなどを使えるシステム作りを行い、形だけではなく本当に使える防災拠点にして欲しいと国に提言している。

過去に学び自然を敬うことの大切さ

地域伝承に非常に関心が高く、さまざまな調査を行ない結果を本にまとめている。自然を征服するなどというおこがましいことは言わないで欲しい。自然に対する畏れと敬いがいかに重要で、洪水や大雪、地震などの自然現象は繰り返すということを、みんなが知らなければならないと感じていた。いろいろな学者がさまざまなことを警告していたのに、ほとんど無視されてきた実態が震災後に表面化した。科学一辺倒の日本の姿勢が被害を大きくしてしまったことにつながったと思う。警告は出ていた。それをちゃんと認めなければいけなかったと思う。自然災害は繰り返していることはわかっていたわけで、過去に学ぶことをしていなかったのだとと思う。伝承・伝説などは大学の先生が言うのであればまだしも、村の古老が言うと一笑に付されたりしたものだ。
10年程前に、秋田の雄物川の災害伝承を河川工事にどのように活かせるか、国土交通省に提案し、予算化してもらい本を作った。過去の災害の事例から、どのような堤防を作ったらよいか、どのような護岸工事を行なえばよいのかを学ぼうと作成した。
「災害に強い男鹿の地域づくり協議会」を組織し、昭和14年の男鹿地震、昭和58年の日本海中部地震という2つの大きな地震を経験した古老たちに、去年1年間ヒアリングを行なった。男鹿地震の記憶がある経験者は80歳を超えている。今年はそれをどのように男鹿の地域づくりに活かせるかを考えながら活動を行なっている。この活動のきっかけは、男鹿の人たちが3.11の後に「俺たちは生活に全然困らなかった。」と言っていたことからだった。なぜかと理由を尋ねると「魚の干物はあるし、畑には野菜があるし、海に行けば魚がいる。1～2週間買い物に行く必要が無い」「燃料は炭で煮炊きした」と笑い、「都会の連中はかわいそうだと思って見ていた。」と言う。保存食は非常食になるのだとその時気づき、家庭でどういった食料を保存していて、それが日本海中部地震の時にどのように役立ったかについても調査している。30年前にさかのぼると、男鹿ではスーパーで買い物をすることは恥ずかしいことだったそうだ。それぐらい自分の家で準備できないのかと思われたという。
調査を進めるうちに出てきたのが核家族化という問題だ。男鹿市の隣の潟上市が秋田市のベッドタウンになっていて、若い世代はそこへ家を建て移り住んでいる。そのため同居家族にも近所にも生活の知恵を教える世代がいない。町内会もほとんど新しい人ばかりだ。男鹿が持っている伝統的な文化の知恵を若い世代に伝承するのが我々の仕事だと思って行なっている。
年寄りたちに「今だったらまだ間に合う」と言われた。非常食としての保存食の活かし方をはじめ、男鹿の知恵を残し、伝えていきたいと思っている。それぞれの土地にある多くの智恵を、笑わないで聞いて、生活に活かすことを考え、次の世代に伝えていくことが、今の世代の役割ではないかと思う。

震災を振り返って

「道の駅」は、行政とも連携した本当に使える防災拠点づくりが必要だ。離れた道の駅同士での姉妹提携も必要だと思う。地域の人たちと道の駅の

撮影：2011.4.7　福島県南相馬市　行方不明者捜査を行なう自衛隊、警視庁の拠点となった道の駅・南相馬

つながりを普段から密にしておくことも大切だ。科学に頼りきらず昔からの伝承や言い伝えを笑いものにしないで伝えていく努力、私たちが東北で得た経験を西日本へ伝えていくことも必要だ。大学の先生たちが仙台平野や福島沿岸での過去の大津波について警鐘を鳴らしていたが、これからは無視できない。各地の原発がある土地ではボーリング調査を行ない地層に残された過去の津波の調査が行なわれている。科学だけではなく、過去の歴史が見直されている。ようやく細々と伝わってきた自然と向き合う知恵や自然災害の警告が活かされるのだろうと期待している。

男鹿の海岸に、周りの岩石と異なった性質の、高さ7～8mの巨石が不安定な状態でたくさん存在している。これだけの巨石を運んでくるエネルギーをもった津波が過去にあったのではないかと、私が所属する秋田のNPO理事長が調査・研究している。これが東日本大震災の前だったら「何をばかなことを」と笑われていたかもしれないが、震災の後ではみんなが真剣に耳を傾けるようになった。

撮影：2012.8.11　福島県いわき市　企業などからの支援で建て替えることができた道の駅・よつくら港（NPO法人あきた地域資源ネットワーク提供）

撮影：2012.1.11　石巻市　卒業制作に取り組む湊小学校の児童（NGO RASICA提供）

撮影：2011.3.31　気仙沼市南郷　ヘドロ出し（NPO法人秋田パドラーズ提供）

撮影：2011.4.1　気仙沼市　大川の状態（NPO法人秋田パドラーズ提供）